

# 江戸城本丸御殿下御鈴廊下の新設時期について

## —江戸城本丸御殿平面図・間取図の収集と研究資源化に関する研究報告

小 粥 祐 子

### 一、はじめに

筆者は、これまでに徳川幕府の居城である江戸城の中に建てられた御殿の図面を収集し整理・分析することで、主に建築史研究の視点から御殿の復原的研究を続けてきた。本稿は、筆者が、近年、あらためて、江戸城本丸御殿の平面図・間取図を収集し直し、平面の編年を整理した結果から得ることが出来た知見のうち、特に、本丸御殿下御鈴廊下の新設時期について報告するものである。

江戸城内の工事に關する史料を編年にまとめた『東京市史稿 皇城篇 一〜三』（東京市役所、一九一〜一九二）によれば、最初に建てられた本丸御殿は、二代秀忠時代の慶長十一年（一六〇六）竣工御殿で、その後、元和八年（一六二二）に改築した。続いて、三代家光時代の寛永一四年（一六三七）・寛永一七年（一六四〇）にも二代秀忠時代の御殿を改築した。しかし、明暦三年（一六五七）の大火により天守とともに本丸御殿も焼失して以降は、明暦の大火を含め四回の火災で焼失し、四代家綱時代の万治二年（一六五九）、二代家慶時代の弘化二年（一八四五）、一四代家茂時代の万延元年（一八六〇）に再建されている。

江戸城本丸御殿は、幕府の政庁・儀式典礼の場である表向、將軍の住居である中奥向（単に奥向とも言う）、將軍とその正室である御台所の

住居である大奥向の三領域に分けられていた。このうち、表向の建物は、江戸時代初期に若干改築されることはあったものの、幕府の体制が安定し、儀式典礼が定型化するようになると、火災による御殿焼失後の再建時も、それまでの建物が踏襲され固定化するようになった。ただし、表向の東側にある大名や旗本が詰める役所向は、幕府の様々な組織変革の中で建物の間取や部屋名に変更が加えられることがあった。

一方で、將軍や御台所など家族が日常生活を営む中奥向・大奥向は、將軍の代替りに伴う家族構成の変化などによって平面や室内意匠に変更が加えられる「模様替え」が行われた。つまり単純に考えれば、將軍の人数だけ、異なった平面図が作られたことになる。しかし、これまでの研究によって、具体的に確認されている平面は、三代家光、五代綱吉、六代家宣、七代家継、八代吉宗、十二代家慶だけである<sup>1)</sup>。

さて、本稿で取り上げる本丸御殿下御鈴廊下とは、中奥向と大奥向とを結ぶ二本の御鈴廊下の内の一本である。御鈴廊下は、当初、西側に作られた。その後、東側に新たに一本作られたのに伴い、西側を上御鈴廊下、東側を下御鈴廊下と呼ぶようになった（図1）。しかし、上・下御鈴廊下ともに新設時期は分かっていない。

筆者がこれまでに収集した江戸城本丸御殿の平面図に、下御鈴廊下を「新御鈴廊下」と記しているものがある。御鈴廊下にわざわざ「新」と

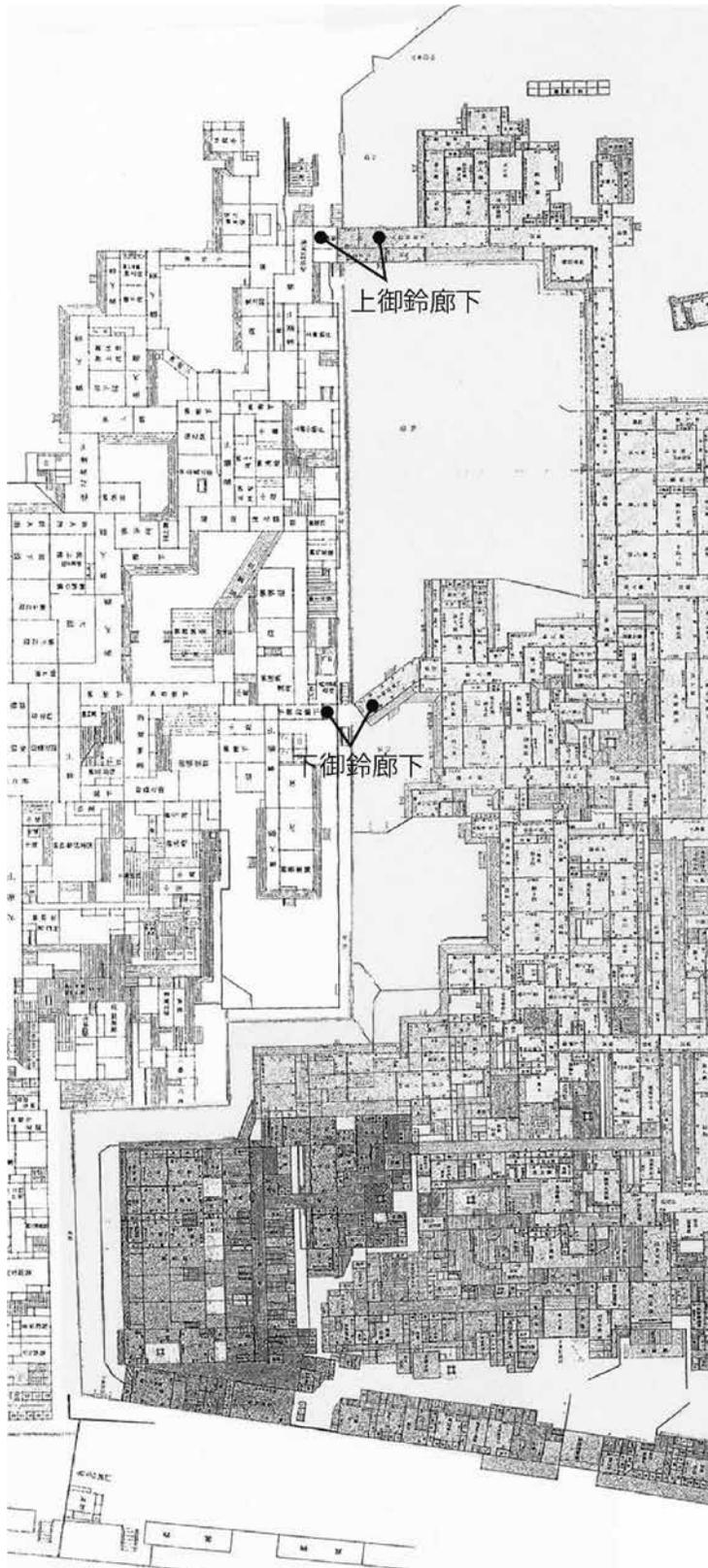


図1 上・下御鈴廊下部分「江戸城御本丸御表御中奥御殿向御櫓御多聞共絵図」『大奥向絵図』（『東京市史稿皇城篇』附図）…弘化度造宮

つけていることから、「新御鈴廊下」と示されている平面図は、後に「下御鈴廊下」と呼ばれるようになる廊下を新設した後に作られたと考えられる。そこで、本稿では、「新御鈴廊下」と記された平面図に記載された情報を整理することにより、下御鈴廊下の新設時期を明らかにしたい。

## 二、下御鈴廊下の新設時期に関する先行研究

江戸城本丸御殿の平面図に関する先行研究は、主に文献史学と建築史学とにより進められている。文献史学では、深井雅海が主に本丸御殿の間取図と儀礼図から平面と儀礼との関係、將軍の代替りによる中奥向平面の編年について、畑尚子が大奥向長局における奥女中の住居の場所について論じている。また、元々は考古学が専門ではあるが、野中和夫も『江戸城築城と造営の全貌』の中で御殿平面を編年している。

建築史学では、内藤昌と平井聖が江戸城関連図面と文献史料とを対比させて図面を編年にし、内藤の成果を基に伊東龍一・服部佐智子・筆者などが、新出図面を見出す度に図面の編年を検討し直している。さらに、平井は儀礼図から本丸御殿表向の建物の使われ方についても論じている。本稿で報告する新御鈴廊下（下御鈴廊下）の設置時期については、これらの先行研究において、次のように記されている。

・文献史学

深井は、

御鈴廊下が二本になったのは明暦（一六五五年）以後のこととされている。現存している絵図によると、御鈴廊下は、おそくとも九代將軍家重時代のはじめころまでは、中奥の御休息之間近くにある一カ所（上御鈴廊下）のみであった可能性が高いが、この点の確認は今後の課題である。

としていて、根拠は示されていないものの、二本の御鈴廊下が設置され

たのは、明暦の大火以降、つまり万治二年に再建された（以下、万治度と記す）御殿であるとしている。

畑は、御三卿・一橋家を興した一橋宗尹の日記『覚了院様御実録』（「一橋家文書」茨城県立歴史博物館所収）から、延享四年（一七四七）六月二十二日の記述に一橋家当主となった宗尹（幼名は小次郎）が、江戸城本丸御殿に登城し、大奥にいる叔父・万次郎（のちの、清水重好）との対面のため大奥へ渡る際、「下御鈴廊下」と推測される廊下を使ったことを指摘し、新御鈴廊下の設置は、八代吉宗時代である可能性を示唆している。また、畑は、「二本ある御鈴廊下のうち、下御鈴廊下が設置された時期はいまだに特定されておらず、これがわかれば重大な発見となる。」とも述べている。

野中は、八代吉宗が將軍在任中の本丸御殿平面図には新御鈴廊下（下御鈴廊下）が示された図面は見出すことができないものの、吉宗が將軍を退位し、大御所として西丸御殿へ移徙した際の御小座敷改造図に下御鈴廊下が描かれていることを指摘している。野中は論考中で明確に論じてはいないが、下御鈴廊下は吉宗が將軍在任中に本丸御殿に新設されたと考えているようである。本丸・西丸ともに下御鈴廊下は「享保年間終わりにから寛保年間の吉宗時代の設置と考えるところである。」と述べている。

・建築史学

内藤は、主に、幕府作事方大棟梁・甲良家に伝わる建築図面を編年にした上で、御鈴廊下が二本になる時期について、弘化二年に再建された（以下、弘化度と記す）本丸御殿の平面図とされる『江戸城御本丸御表御中奥御殿向御櫓御多聞共絵図』『大奥向総絵図』（『東京市史稿皇城篇附図』）などを基に、

大様は万治度と同じであるが大奥に変更が見られる。かつての御主殿に相当する御上の間に加えて新御殿が天守台下に増築され、それ

につれて御対面所も北方へ移動、その跡に御客座敷と御新座敷が新設されている。かような変化に伴い、中奥から大奥へ至る御鈴廊下も従前の一本から上・下の二本となる以外、表・中奥は旧制のままである。<sup>15)</sup>と述べている。

伊東も、内藤の論考を踏襲し、

弘化度の御殿は、先の御殿が天保十五年（一八四三）に焼失した後弘化二年（一八四四）に完成している（中略）。中奥細部に変化がある他は、中奥・大奥をつなぐ御鈴廊下が二本になり、大奥では西南に新御殿ができ、対面所がやや北側に移動して、その南側の下御鈴廊下に接続する御客座敷・新座敷が新設されたことが新たな変化であった。<sup>16)</sup>

と述べており、さらに、服部も、弘化度本丸御殿大奥の平面図から、『大奥向絵図』（『市史稿』所収）は、天保十五年の火災で焼失した弘化度造営後の「大奥」を示したものである。この絵図には、「中奥」「大奥」をつなぐ御鈴廊下が二本あり、北西に新御殿ができ、御対面所がやや北に移動し、その南側の御鈴廊下に接続する御客座敷、御新座敷が描かれている。これらの変化を伊東龍一氏は弘化度の<sup>17)</sup>変更箇所と判断している。

しかし、平井は、万治度本丸御殿の平面図である「御本丸御殿向其外絵図」（早稲田大学図書館蔵）と「江戸城奥向御殿指図」（細川家文書）に「新御鈴廊下」があることから、御鈴廊下が二本になる時期は弘化度の一つ前にあたる万治度本丸御殿であることを指摘している。<sup>18)</sup>先述のように、万治度本丸御殿は、万治二年（一六五九）に再建された御殿で、天保一四年（一八四三）に焼失するまで約一八四年間建っており、この

間、将軍が八人替わり、代替わりともに新しい将軍が本丸御殿へ移徙した。弘化度本丸御殿再建時には、それまで建っていた御殿を踏襲して設計された。弘化度本丸御殿の平面図に「下御鈴廊下」があることから、その前に建っていた万治度本丸御殿に御鈴廊下が二本あった可能性を検討することも必要である。これを裏付けるように、筆者は、『本丸廻状留』（『東京市史稿皇城篇 第三』所収）の天保十二年（一八四七）に「大奥下鈴廊下并二長局取繕」という記述があることを指摘している。<sup>19)</sup>

### 三、江戸城本丸御殿下御鈴廊下の新設時期の検討

江戸城本丸御殿の中奥向と大奥向の境に、二本目の御鈴廊下、つまり下御鈴廊下が新設された時期を特定するために、まず、「新御鈴廊下」と記された平面図の年代比定を行う。

そこで、筆者が見出した「新御鈴廊下」と示された平面図を次に挙げ、これらの平面図から新御鈴廊下の設置時期について検討する。なお、本稿は新御鈴廊下の設置時期を検討するものであるので、新御鈴廊下の名称が「御鈴廊下」や「下御鈴廊下」と改称されている平面図については取り上げない。

一 「新御鈴廊下」の表記について

・図面A…（江戸城本丸御殿大奥向絵図）江戸御城内図 7枚（の内1枚）・（東京都公文書館蔵）（図2右図）

図面Aには大奥向のみが示されている。年紀は見られない。御鈴廊下は西側と東側にそれぞれ一本ずつ示されており、西側には「上御鈴廊下」、東側には「新御鈴廊下」と書かれている。

・図面B…（江戸城本丸御殿表奥向絵図）江戸御城内図 7枚（の内1枚）（東京都公文書館蔵）（図2左図）

図面Bは、図面Aに繋がる表向・中奥向を示した図面である。図面B



図2 御鈴廊下部分「江戸御城内図七枚之内」(東京都公文書館蔵) 右：大奥向、左：表奥向

にも御鈴廊下が二本示されているが、「新御鈴廊下」の位置には単に「御鈴廊下」と書かれている。

・図面C：「御本丸御殿向其外絵図」（早稲田大学図書館蔵）（図3）

図面Cは、表向・中奥向・大奥向からなる本丸御殿全体が示された図面である。中奥向と大奥向との境に掛け紙がある。図面Cの表紙に、「右立合持場分修復、寛政二年八月十日、近藤吉左衛門差上ル」と書かれていることから、寛政二年（一七九〇）に行われた修理に用いられた図面であると考えられる。

掛け紙上・下、どちらにも、西側と東側に二本の御鈴廊下が示されているが、東側の御鈴廊下については、掛け紙下には「新御鈴廊下」と書かれているのに対し、掛け紙上には「御鈴廊下」と書かれている。掛け紙上には、「新御鈴廊下」に相当する位置に「下御鈴廊下」と書かれており、その中奥向側に「御休息」の平面が示されている。

このことから、掛け紙上は「新御鈴廊下」新設後、下御鈴廊下周辺を新たに改築した図面であることが考えられる。

・図面D：「江戸城奥向御殿指図」（細川家文書）

図面Dは、大奥向と中奥向の一部が示された図面である。本図については、平井によって、大奥向に「御内証之御方住居」「五十姫様御住居」の付箋があること、五十姫は十代家治の御台所であることが指摘されている。五十姫は、宝暦十年（一七六〇）から明和八年（一七七二）に死去するまで本丸御殿に住んでいた。

江戸城本丸御殿の平面図は、その図面用途によって、表向、中奥向、大奥向、それぞれが単独で示される場合、表向＋中奥向あるいは大奥向だけ、表・中奥・大奥向が一枚に示される場合がある。

しかし、図面Dは、大奥向から中奥向に向けて「新御鈴廊下」が延び、中奥向全体の平面ではなく新御鈴廊下に直結する部屋「御新小座敷」の

みが示されている。

図面E：「江戸御本丸御奥御殿向絵図」（国立公文書館蔵）

図面Eは、大奥向のみが示された図面である。「文久三亥年三月中旬写之 橋実成」との端書があるが、年紀は見られない。本図には御鈴廊下が二本あり、東側の一本には「新御鈴廊下」と記されている。

①「新御座敷」の用途と新設の理由について

先に挙げた図面A・Eのうち、「新御鈴廊下」とともに、図面B・Cには中奥向に「新御座敷」、図面Dには「御新小座敷」という部屋名が示されている。「新御座敷」「御新小座敷」ともに部屋名に「新」がついていることから、「新御鈴廊下」の設置に関係する部屋ではないかと推測される。

① 図面B・C：「新御座敷」の構成

「新御鈴廊下」（図面Bでは「御鈴廊下」）に直行して「御廊下」が繋がりが、廊下の南側には「御広敷構」という部屋が見られる。また、「御廊下」の東側には大きさの異なる「御溜」が二部屋並んでいる。このうち規模の狭い方の「御溜」の北側には大用場と小用場がついている。

「新御座敷」は「御溜」の南側に位置し、「新御座敷」の西側に「押入」三つを備えた「御次」がある。さらに、「新御座敷」の東側には、東西に二部屋並んでいる。図面Cによると、東側は「競馬之間」、西側は「御次」と書かれている（図面Bには「競馬之間」の表記が見られない。）これらの二部屋の東と南側には入側と縁側が巡っている。

② 図面D：「御新小座敷」の構成

「新御鈴廊下」に直行して「御廊下」が繋がりが、さらに「御廊下」に直行するように「御新小座敷」がついている。「御新小座敷」の南側には「御次」が、西側には大用場と小用場がついている。「御新小座敷」の東側には「御廊下」が付き、さらに東から床・棚がついた「競馬之間



上之間「御次」が並んでいる。この二部屋の東側と南側には入側と縁が巡っている。なお、図面B・Cにあった「御広敷構」は示されていない。

図面B・C「新御座敷」と図面D「御新小座敷」には、大小用場があること、将軍が日常生活を送る中奥向のある部屋であることから、「新御座敷」「御新小座敷」は住居であると推測することができる。一方で、中奥向において、将軍は、中奥向の西側に「御休息」「御小座敷」と呼ばれる部屋で日常生活を送った。つまり、「新御座敷」「御新小座敷」は将軍以外の人物が用いた可能性が考えられる。

将軍以外の人間が中奥向に住むことについては、畑が、将軍庶子が中奥向に住む「表御住居」について指摘している。畑は、『覚了院様御実録』（『一橋家文書』茨城県立歴史館蔵所収）から、本丸御殿に「表御住居」したのは、八代吉宗の四男である小五郎（一橋宗尹）と、九代家重の次男である万次郎（清水重好）であることを明らかにしている。<sup>20</sup>また、「表住居」については、『幕府祚胤伝』（図書刊行会『柳宮婦女伝叢』一九一二、所収）からも、小五郎と万次郎の例を確認することができる。

このうち、『幕府祚胤伝』に記された小五郎の「表御住居」に関する記述を見ると、

同（享保）十七年壬子十二月四日、御座御移徙、御広舗構内之内、右之方新規御普請出来、表住居二付御附人相増、近習番廿四人、醫師一人、此外伊賀格之者九人、坊主廿五人、六尺十六人等、外略とある。

これによれば、中奥向御広敷構内の右の方に、小五郎の御座所が新規に作られたことがわかる。先に挙げた図面B・Cには、いずれにも「新御鈴廊下」の中奥向に「御広敷構」があり、その右側に小五郎の御座所に相当すると考えられる「新御座敷」が見られる。

以上のことから、「新御鈴廊下」は小五郎の「表御住居」に伴って新

設されたと考えられる。

なお、小五郎の「表御住居」に伴う中奥向の改修に当たっては、『年録』（国立国会図書館蔵）に次の記述がある。

（享保十七年十二月）七日

西丸へ被為越

芙蓉之間

小普請奉行

時ふく三

御右筆部屋溜

小普請方

銀七枚

躑躅之間

同改役

同五枚

焼火之間

棟梁

同三枚

右小五郎様御座所御普請御用相勤候二付被下也

右同断二付被下候旨書付渡大勢有之

（以下略）

幕府の建築・修理工事は、作事方と小普請方とが担った。当初は、作事方が新築工事、小普請方が修理を担当していたが、次第に小普請方の勢力が台頭し新築工事まで関わるようになった。右の記録によると、小五郎の「御座所」つまり中奥向での住居を建てるにあたり、小普請方支配の大工頭・鈴木九八郎、片山与八郎、同改役・水野三郎右衛門、同大

工棟梁・依田淡路が工事を担当し、幕府から褒美を受けたことが明かとなる。

他方、万次郎の「表御住居」については、『幕府祚胤伝』に、

同(宝曆)八年戊寅十一月廿七日、御表御住居

とあるだけで、具体的に中奥向のどこが御座所であったのかは記されていない。ただし、図面Dが宝曆十年(一七六〇)から明和八年(一七七)に用いられた平面図であるので、万次郎の「表御住居」に伴って改築したことと関連するのかもしれない。

一三「新御座敷」の設置理由の検討

では、吉宗が中奥向に小五郎を住ませた理由は何なのであろうか。

周知の通り、紀州からいわゆる養子將軍として徳川宗家を継いだ吉宗は、様々な改革を成し遂げた。また、長男・家重を將軍に、二男・宗武に田安家、四男・宗尹(小五郎)に一橋家を興させている。

一橋宗尹(小五郎)を祖とした一橋家に関する『一橋家文書』を長年に渡り整理し、解題および多数の論考を執筆している辻達也は、吉宗が自分の息子に田安と一橋に屋敷を与え、一大名として独立させなかったことについて

成長した將軍庶子を分家独立させては際限もなくなるので、生涯部屋住とし、然るべき大名家があれば養子に送込まうという意圖だったのではあるまいか。<sup>(21)</sup>  
と述べている。

さらに、辻は、吉宗と小五郎(一橋宗尹)の親子関係について

(前文略) 田安宗武は和歌をよくし、國文學を愛好するなど堂上貴族的教養人だったのに對し、一橋宗尹は武藝狩獵等父吉宗に通ずる趣味をもつて居た。『續三王外記』に「王(吉宗)登極の後、未だ嘗て諸侯の邸を過ぎず。但、田安・一橋邸を過ぐ。殊に子宗尹を愛

し、亟ばこれを過ぐ」(原文漢文)とある。『續三王外記』の史料價値はかなり低いとみなされてゐるが、或は吉宗は性格・思考が自分に近い宗尹を愛して居たのかも知れない。<sup>(22)</sup>  
と述べている。

現時点で、筆者は「新御鈴廊下(下御鈴廊下)」の新設理由が明確に記された文献史料を見出すことができていない。しかし、本稿で報告した図面の分析結果と、先に挙げた辻の論考から、現代流に言えば、吉宗は四人の息子の中でも特に寵愛していた小五郎を自分の近くで育てるために、それまでの、將軍庶子は主に大奥で育て、一大名として独立させるという慣例に従わず、一定の時期まで自らの住居である中奥に住まわせることにしたのでないだろうか。

#### 四、おわりに

本稿では、江戸城本丸御殿下御鈴廊下が新設された時期について、下御鈴廊下を「新御鈴廊下」と記している図面の表記内容、それに関わる文献史料から明らかにすることを試みた。

その結果、「新御鈴廊下」の新設時期は、八代吉宗時代で、具体的には吉宗の四男小五郎の「表御住居」と関係すると考えられる。

なお、これまでに筆者が収集した本丸御殿の平面図には、二本の御鈴廊下のうち、東側の一本、つまり下御鈴廊下を単に「御鈴廊下」としている図面もあり、「御鈴廊下」周辺の中奥向平面は、「新御鈴廊下」と記された平面図と変化が見られた。このことは、何らかの要因によって新御鈴廊下(下御鈴廊下)周辺に更なる模様替えが行われたことを示唆するのではないかと想像される。

江戸城本丸御殿は、再建時に先例を踏襲して建てられるというイメージが先行しているせいも、出版物や研究論文などにおいて『東京市史稿

皇城編附図』や幕府作事方大棟梁・甲良家旧蔵図面の一部など、特定の図面ばかりが用いられる傾向にある。しかし、実際には、本丸御殿の中奥向・大奥向で生活した將軍や家族、それぞれの事情により、現在、知られているよりも沢山の図面が残されている。江戸城本丸御殿中奥向・大奥向の平面の変化は、將軍およびその家族の構成や日常生活の実態を読み解く上で貴重な情報であると考ええる。このことから、今後より多くの平面図を収集し分析していく必要がある。

〔註〕

- (1) 深井雅海『図解 江戸城をよむ』原書房(一九九七)、拙稿『江戸城のインテリア 本丸御殿を歩く』河出書房新社(二〇一五)
- (2) 註1に同じ
- (3) 畑尚子『江戸奥女中物語』講談社(二〇〇二)、『徳川政権下の大奥と奥女中』岩波書店(二〇〇九)
- (4) 野中和夫『江戸城・築城と造営の全貌』同成社(二〇一五)
- (5) 内藤昌『江戸の都市と建築』『江戸図屏風』毎日新聞社(一九七二)、平井聖『江戸城江戸城(日本名城集成)』小学館(一九八六)ほか
- (6) 伊東龍一『江戸城1(城郭)(城郭・侍屋敷古図集成)』至文堂(一九九二)
- (7) 服部佐智子・篠野志郎『江戸城本丸御殿大奥御殿向における殿舎構成の変遷と空間構成について』『日本建築学会計画系論文集74巻61号』(二〇〇九)
- (8) 拙稿『江戸城のインテリア 本丸御殿を歩く』河出書房新社(二〇一五)ほか
- (9) 註5 平井に同じ
- (10) 深井雅海『55中奥と大奥との出入り口「御鈴廊下」』『図解 江戸城をよむ』pp. 216-217
- (11) 畑尚子「書評『茨城県立歴史史料館飼料叢書17 橋家文書 覚了院様御実録Ⅱ』」『茨城県史研究99』(二〇一五)

- (12) 畑尚子「新刊紹介 小粥祐子著『江戸城のインテリア 本丸御殿を歩く』昭和女子大学紀要『学苑』(二〇一六)

- (13) 註4に同じ
- (14) 註4に同じ
- (15) 註5 内藤に同じ
- (16) 註6に同じ
- (17) 註7に同じ
- (18) 平井聖・小粥祐子「江戸城本丸御殿万治度大奥絵図の編年」『2013年度日本建築学会大会(北海道) 学術講演会・建築デザイン発表会 建築歴史・意匠梗概集』(二〇一三)
- (19) 註8に同じ
- (20) 註11に同じ
- (21) 辻達也『新稿一橋徳川家記』(一九八三)
- (22) 註21に同じ

本稿は、東京大学史料編纂所共同利用・共同研究拠点における一般共同研究(二〇一八年度)「江戸城本丸御殿平面図・間取図の収集と研究資源化に関する研究」の成果の一部である。

謝辞

本研究にあたり、東京大学史料編纂所教授・杉本史子先生、学習院女子大学名誉教授・松尾美恵子先生からご指導を賜りました。また、国立公文書館専門員・高橋喜子氏、東北大学東北アジア研究センター助教・野本禎司先生からは、関連史料についてご教示を頂きました。記して謝意を表します。